

## 隼人の実像

### 1. 隼人論の現状

隼人は、現在薩摩隼人と言う使い方で、鹿児島県の元気のいい男というような意味で使われているが、奈良時代の日本最古の歴史書日本書紀や古事記にすでに書かれている。

古事記がAD712年ころ、日本書紀がAD720年頃の成立である。又そのころ大隅地方で隼人の乱（AD720年）がおきている。隼人の乱に手を焼いているころ、記紀は成立しており、更に300年ほど遡及して隼人の記事が記載されたことになる。その当時の記録を丹念に研究した中村明蔵氏の成果を、資料として添付しているが、大きく分けると300年ほど前（AD400年前後）から畿内に移住していた隼人と、その当時に前後して日本南部よりやって来た者や南部の種族（隼人）の記録となる。300年程前に畿内に移住した隼人の話は、史実としての根拠がないため、現状としては創作されたものとして扱われているようである。

一方、AD702年に唱更国（ハヤヒト若しくはハヤト 漢代の防人 後の薩摩国・現薩摩半島）が日向国から分立した。AD713年には大隅国（大隅半島）が日向国から分立した。大分・熊本以南は日向国だったのが、農民の反乱を期に、薩摩半島を唱更国・大隅半島を大隅国とし、住民を隼人としいわば蛮族として分割統治したものと思う。これによって、大和朝廷の権威も上がったものと考えられている。国内南・北の隼人・アイヌの夷狄を統合し国家を成立させたことになる。こういう意図があって、隼人は取り扱われたというのが、隼人論の現状である。

### 2. 記紀の中の隼人

日本書紀の中に神話の部分を除いて、AD400年ころ畿内に移住した隼人の話が二度書かれている。近習として仕えていた隼人が主人で仁徳天皇の次男である住江仲皇子を暗殺する話と、雄略天皇の死に際し、七日間号泣し自害した話である。住江仲皇子以外の兄弟は履中・反正・允恭と天皇に即位している。雄略天皇の皇后は、仁徳天皇と諸県君牛諸井の娘の髪長媛との間の女・草香幡媛皇女である。二人の間に子供はいなかった。

#### 住江仲皇子暗殺の部分 日本書紀より

時に、近習（<sup>きんじゆう</sup>側近の意）の隼人がいた。刺領巾（<sup>はやと</sup>）という。瑞齒別皇子は密かに刺領巾（<sup>サシヒレ</sup>）を呼んで言われた。

「私のために皇子を殺してくれ。私はきつとお前に厚く報いるから」そして、錦の衣と（<sup>はかま</sup>）揮（<sup>サシヒレ</sup>）を脱いで与えられた。

刺領巾は依頼された言葉どおり、一人で矛をとり、仲皇子が厠に入るところを伺って、刺し殺した。

そして瑞齒別皇子について。木菟宿禰は瑞齒別皇子に、「刺領巾は人のために己の君を殺した。それは、自分のためには大きな功があるけれども、私の君に対しては慈悲の無いこと甚だしく、生かしてはおけない」と言った。

そして刺領巾を殺した。その日、倭（<sup>サシヒレ</sup>）に向った。

日本書紀では、この隼人の名前はサシヒレとなっている。古事記ではソバカリである。記紀編纂時に創作されたとすれば、隼人の名前に食い違いは発生しないものと思う。独立した原典があったらばこそその食い違いだろうと考える。反抗する隼人対策としての創作ではなく、本来伝承等があったものと考えている。又、隼人が、記紀ともに近習という天皇の私的な立場から、公的な役職（いわゆる出世）を強く求めているのがわかる。

#### 雄略天皇葬送の時 日本書紀より

冬十月九日、雄略天皇を丹比高鷲原陵に葬った。このときに近習の隼人たちは、屋夜、陵のそばで大声で悲しみ、食物を与えても食わず、七日目に死んだ。役人は墓を陵の北に造り、礼をもって葬った。この年、太歳庚申。

### 3. 髪長媛のエピソード

髪長媛畿内に現れる 日本書紀より

ある説によると、日向の諸県君牛は、朝廷に仕えて老齢となり、仕えをやめて、本国に帰った。そして、娘の髪長媛を奉った。

播磨国にやってきた天皇は、淡路島で狩りをなさった。そして西の方をご覧になると、数十の大鹿が海に浮いてやってきて、播磨の加古の港に入った。天皇はそばの者に、「あれはどういう鹿だろう。大海に浮かんで沢山やってくるが」

と言われた。お側の者も怪しんで、使いをやって見させた。見ると皆、人である。

ただ角のついた鹿の皮を、着物としていたのである。「何者か」というと、答えて、

「諸県君牛です。年老いて宮仕えができなくなりましたが、朝廷を忘れることができず、それで私の娘である、髪長媛を奉ります」と言った。天皇は喜んで娘を宮仕えさせられた。それで、当時の人は、その岸に着いた処を名づけて、鹿子水門といった。水手（船員のこと）を鹿子というのは、この時から初めて発生したという。

この不思議なエピソードは、理解不能であったが、道教では仙人は牛や鹿に乗ってやってくるという。魏志倭人伝によると、邪馬台国には牛や馬はいないということであるが、当時いたとしても少なかつたであろう。そのために鹿が選ばれたのではないだろうか。鹿の皮を纏った道教徒に担がれて、当時のヤマトの国の国境加古川に入っていったのではないだろうか。ちなみに加古川と日向の国府があった西都市（具体的には都於郡）には、景行天皇がやって来たという伝承があり、又平郡さんという名前の多いところである。当時平郡さんは、ヤマト王権出向役人であつただろう。平郡さんの手引きで髪長媛一行は、無事ヤマト国に入っていったものと思う。

この担ぎ手たちが、記紀編纂時に出身地が諸県と特定されるため、前段の隼人と同様に記載されることはなかったが、髪長媛とともに天皇家へはいり、近習になっていったものと考えている。雄略天皇の葬送の時の話に戻るが、東南九州に渡来し、のちに隼人と言われた者たちは日向では多くは望めないと考え、畿内への進出を狙っていたのだろうか。髪長媛の使いとなり、仁徳天皇周辺の近習となって、位に就くことを狙っていたのだろう。ソバカリは、古事記では大臣という位と引き換えに主人の暗殺を引き受けている。逆に殺されてしまうのだが、髪長媛の娘が雄略天皇の皇后となり、女性では最高位に就くことになる。大いに一族の繁栄を期待していたところで、次代の天皇を生ませることもなく、雄略天皇が亡くなってしまった。大いなる落胆が、隼人の号泣して死んでいったエピソードだろう。

将来の可能性を失った畿内隼人たちの多くは、雄略天皇の皇后草香幡姫皇女のもとで、日下部氏となり、各地に散っていたのではなかろうか。草香幡姫皇女は各地に領地を持ち、いわばその使用人が日下部である。あるいは、渡来人たちはクサカを自称していたのかもしれない。東南九州の在地の人たちと、何らかの区別する名称があつたのではなかろうか。

#### 4. 天皇の世代

天皇の実年代を推定するのは非常に困難であるが、必ずしも長子継承ではなかったため、25歳で後継者をつくったとすると生物学的には妥当性が出てくる。この時代は直系であるのでざっくり推定すると景行天皇の時代はAD300年から325年、成務天皇326年から350年、仲哀天皇351年から375年、応神天皇376年から400年、仁徳天皇は401年から425年、履中天皇は426年から450年、雄略天皇は451年から475年となる。仲哀天皇は早死にしているから応神天皇の時代が前倒しに長くなる。最もそこは神功皇后の摂政の時代がかぶってくる。履中天皇の時代は、反正天皇と允恭天皇の時代でもあり、3人で分け合うことになる。ざっくりと計算したのは、髪長媛の年齢を推定するためである。それぞれの年数は伸縮するが、トータル年数の伸縮はそれほど大きくなる。もっとも倭王武は、478年には生きていたようである。髪長媛は応神天皇の妃として日向・諸県よりやって来たが、仁徳天皇に見初められ応神天皇に譲られてその妃となった。その子どもが雄略天皇の皇后である。雄略天皇は、仁徳天皇の孫である。雄略天皇は母親のような年齢の皇后を持ったのだろうか。総合的・合理的に考えると、応神天皇が孫のような妃を仁徳天皇に譲り、仁徳天皇は娘のような妃を得て孫のような娘（草香幡媛姫皇女）を得た。一方皇后との間には、息子のような息子そして孫（雄略天皇）を得た。こう考えると、雄略天皇は同世代の皇后を得ることになる。併せて、髪長媛はAD380年前後の生まれとなろうか。宮崎の本庄生まれの髪長媛が、特段の美女と記されているところは、女性の渡来人と牛諸井との間の混血美女だったのではないかと考えている。引き目鉤鼻おちょぼ口、瓜実顔のお雛様のような美女は当時は珍しく、あこがれの的だったと思う。

#### 5. 地下式横穴墓との関連

東南九州に地下式横穴墓という墓制がある。南九州特有と言われているが漢の土洞墓である。朝鮮半島でも、東京でも見つかっており漢代の墓制が、朝鮮半島を経由し南九州に、ルートはわからないが関東にも伝わったもののようだ。土洞墓はあまり身分の高いものの墓制ではなく下級墓制となっている。あの世は地下にあると唱える、道教のものともいえよう。中国のお墓は、地下に墓室を作ることが多い。日本の前方後円墳は、墓室は築造前の地盤面より上にある。南九州で土洞墓（地下式横穴墓）がつくられた時期は4~5世紀とされている。渡来人によって造られたものであろう。朝鮮半島の鉄器や馬具、女性用の装飾品、そして渡来人のものと思われる頭蓋骨が出ている。古墳時代の宮崎平野で、大柄の人骨が出土するといわれているのも同じ理由だろう。

AD380年頃、日向諸県に渡来人がやって来て、混血美女が生まれ、AD400年頃から少しずつ地下式横穴墓ができたとしてもおかしくない。

地下式横穴墓は、南九州南東部から内陸部に多い。AD300年代後半に渡来し、畿内進出をうかがっていた折に、応神天皇より髪長媛の入内要請があり、それに便乗しての進出で、それから天皇家の私設秘書のような立場であったのではないだろうか。何とか公的な地位に就きたいという思いが、住江仲皇子暗殺事件となったのだろう。

#### 6. 中村明蔵氏の研究について

最後に中村明蔵氏の研究成果である、各種資料に出てくる隼人につて時系列にまとめた表を添付してある。あなたの生徒でもあるので、無断で添付したことを、心広くお許しいただきたいと思う。大きく分けると、すでに畿内に住んでいた隼人と南方からやって来た来歴の

明確な隼人である。プロト隼人と今来の隼人と区別しようと思う。今来の隼人は、何処から来た隼人とかどこの隼人と言った記述になっており、大まかに言えば現在の鹿児島県の人たちを指している。プロト隼人は、記紀には出自の記載がないが、原書には彼らを隼人つまり現鹿児島より来た者という情報があったのだろうか。プロト隼人の時代は、大分・熊本以南はすべて日向国である。大隅や薩摩の地域名が書かれていたため、遡及して隼人と呼ばれるようになった可能性とともに、唱更国と書かれていた可能性を指摘しておきたい。

漢代の下級武士であろう衛氏朝鮮の末裔が、九州東南部に渡来しえびの・小林・大口の内陸部にまで住み、地下式横穴墓を造った。そのエリアを唱更国と称したと考えているが、日本の地域名としては表現しにくく、単に隼人と称したのではないかと考えている。

## 7. 串間の玉壁

ハヤトと言う名称の由来はわからないが、前漢やその地の道教の文化と思われるものが繋がる。まずは、鹿革の被り物をかぶって諸県から髪長媛を加古川に連れてきた。諸県は地下式横穴墓の多いところである。地下式横穴墓は冥界は地下にあるという道教の墓であり、漢の土洞墓であり、当時の下級墓制でもある。同じく南九州の串間で漢の玉壁が出ている。鹿児島の西側は、薩摩国と呼ばれていたが、その前は唱更国と言われていた。唱更とは、漢の防人のような兵士である。唱更国とは、朝鮮を経由した漢の兵士の国と考えるべきではなかろうか。文献上隼人という言葉が現れるのは、およそAD680年から800年の間という。

AD300年代の末に、渡来人として九州東南部に渡来し、地下式横穴墓や玉壁を残した。ルーツは衛氏朝鮮であろうと考えている。元々は燕の兵士で、箕氏朝鮮を滅ぼしている。前漢に冊封されて、玉壁をもらったものである。その玉壁が石棺より出土している。朝鮮半島からわざわざ持ってきたものを、副葬したのである。副葬するには動機が必要だが、雄略天皇の死去の時の悲しみは、尋常ではなく、すべての今生の希望を失った落胆が、自害につながり、ひいては隼人の本拠地で、王統の証明として保持し続けた玉壁を副葬したのではないかと考えている。唱更国は薩摩半島という現在の説とは異なるが、その中心は今の串間であり、南東九州の渡来人の連絡網があったものと思う。鹿革の被り物の兵士を幅広く集めたり、玉壁の副葬を決めたりしてきたものと思う。そのためプロト隼人は東南九州から来た者となり、ハヤトと言われたのだろう。AD685年に大隅出身であろう大隅直に、忌寸の姓が与えられている。忌寸は、渡来人に多く与えられる姓である。この時代は記紀編纂の少し前の時期で、渡来してから300年ほど経っており、遺伝子もだいぶ薄くなっていたのではないかとと思うが、東南九州には、かつて渡来人がやって来たという記憶があつての編纂であったのだろう。現下に起きている隼人の反乱も、薄まったとはいえ、渡来人の遺伝子を持った者たちの反乱とみていたものと思う。

## 8. 終わりに

西都市の都萬神社の由緒書きに不思議なものがある。最初期の神社守は日下部立治で、土中より掘り出された者とある。生きた人間が土中から出てくるはずはなく、これは創作されたものであるが、ヤマト側の発想ではなく、冥界は地中にあるとする道教徒つまり渡来人の発想である。日下部も雄略天皇の皇后の使用人でありプロト隼人が転身していったものであろう。つまり畿内に行ったプロト隼人が、日向国に帰ってきたのかもしれない。もしくは、プロト隼人は、元よりクサカを自称していたのかもしれない。

西暦	和暦	記事
二四七	和暦	邪馬台国の卑弥呼、狗奴国との交戦を帯方郡に報告する（狗奴をクマソとする説あり）。
?	?	（景行天皇、日本武尊、神功皇后などがクマソを征討したとの記・紀の伝承あり） 瑞籬別皇子（のちの反正）が倭人の近習（記―曾婆訶理、紀―刺領中）をつかって住吉仲皇子を殺させる。
四七八	推古24	倭王武（雄略）、宋の順帝への上表文で、「祖禰が」東は毛人を征すること五五国、西は衆夷を服すること六六国」などと伝える。
（四〇〇年代末）	舒明元	雄略天皇の葬送に際して、倭人が昼夜夜陵の側で哀号。 清寧天皇四年に、蝦夷・倭人ともに「内附」。
五三八	大化元	（仏教伝来）
五四〇	天武8	蝦夷・倭人ともに衆を率いて「帰附」。
五八五	天武6	敏達天皇の殯宮を倭人が警護する。
六一六	天武10	この年掖玖人來朝の記事散見（六二〇、六三二年にも）。
六二九	天武11	田部連を掖玖に遣わす。
六四五	天武8	（大化改新、乙巳の変）
六七七	天武10	多禰島人を飛鳥寺の西で饗す。
六七九	天武11	多禰島に倭馬飼部造連等を遣わす。
六八一	天武14	多禰島から使者帰朝し、国図を貢し、距離、風俗・産物などを報告する。
六八二	天武11	○倭人が朝貢し、大隅・阿多の両倭人が朝廷で相撲をとり、大隅倭人が勝つ。
六八七	天武11	○多禰人・掖玖人・阿麻弥人に禄を賜う。
六八八	天武11	○倭人等を飛鳥寺の西で饗し、人びとが倭人を見物する。
六八九	天武11	畿内移住の大隅直に忌寸の姓を賜う。
六九二	天武11	天武天皇の殯宮で、大隅・阿多両倭人の魁帥が各衆を率い、誅を進め、魁帥等三三七人に賞を賜う。
六九四	天武11	筑紫大宰粟田真人朝臣等、倭人一七四人・布五〇常・牛皮六枚・鹿皮五〇枚を献上する。
六九五	天武11	筑紫大宰に詔して僧侶を大隅・阿多に遣わし、仏教を伝えさせる。
六九八	天武11	（藤原京に奠都）
六九九	天武11	大隅倭人を饗す。飛鳥寺の西で倭人の相撲を見る。
七〇〇	天武11	文忌寸博士・刑部真木等八人に武器を与え、覓国使として南島に派遣する。この年、日向国初見。
七〇一	大宝元	○多檜・夜久・菴美・度感等の入朝貢す。
七〇二	大宝2	○大宰府に三野（日向国児湯郡三納郷か）・稻積（大隅国桑原郡稻積郷か）の二城を修築させる。
七〇七	大宝4	○覓国使南島より帰朝す。
七〇九	大宝4	薩末比売・久米・波豆、衣評・督衣君・助督衣君・豆自美、肝衝難波が肥人等を従えて覓国使をおびやかしたので、筑紫惣領に命じて罰する。
七一一	大宝4	（大宝律令完成）
七二〇	大宝4	○薩摩・多檜が命令にさからったので兵を送って征討し、戸口を調べ役人（国司）を配置す。薩摩国（前身）・多檜嶋成立。
七二一	大宝4	○薩摩倭人を征討した軍士に勲位を授ける。
七二二	大宝4	○薩摩倭人征討に際して祈禱した大宰府管下の神九処に奉幣する。
七二三	大宝4	○唱更国（薩摩国の前身）の国司が国内の要害の地に柵を建てて兵士と武器を置くことを申し出たので許可する。
七二四	大宝4	大宰府で南島人に位を授け、物を賜う。
七二五	大宝4	薩摩倭人の郡司以下一八八八朝貢する。諸国の騎兵五〇〇人を徴集して威儀を整える。
七二六	大宝4	○倭人・蝦夷が正月の朝賀の式に参列す（後日、授位・賜禄がある）。
七二七	大宝4	○日向国は采女を、薩摩国は舍人を貢上する。
七二八	大宝4	（平城京に遷都）
七二九	大宝4	○日向国の肝坏・贈於・大隅・始羅の四郡をさいて大隅国を設置する。
七三〇	大宝4	○倭賊を討った將軍ならびに士卒のうち、軍功のあった一二八〇余人に勲位を授ける。
七三一	和銅6	○豊前国の民二〇〇戸を移住させて倭人を勧導させる。
七三二	和銅6	○多檜嶋に印一面を賜う。
七三三	和銅6	○太朝臣遠建治等、奄美・信覚・球美等島人五二人を率いて帰朝する。
七三四	和銅6	南島人・蝦夷が朝賀の式に参列す（その後、南島人七七人に授位）。